始

特232
704

光風會同人作
伊東月草選輯

光風

第一輯

東京 草上書屋刊

昭和十四年十一月 帝國圖書館

序

茲に集められた作品は、光風會創設以來三ケ年の收穫である。會員のうちには、光風會の組織せられる前からつくつてゐた方もあるが、この會によつてはじめてつくる方が大部分なのであるから、この集は珠玉のやうに光る作品、仰ぎ見るやうな高い作品に滿たされてゐるわけではない。もと〳〵この集はひろく天下に問ふ意味のものではなく、修業の一過程を錄して大方の示教を仰ぎ、今後の向上に資する意味のものであるから、必ずしも珠玉的作品のみを以て滿たされなくても差支へないのであるが、たゞ光風會同人が僅かに三ケ年の修業によつて、これだけの境地を拓き得たことはよほど自慢していゝと思ふ。上手な句、巧みな句には乏しいけれども、その代りどの句も垢がとれてゐる。匠氣がなく、俗氣が拭はれてゐる。稚拙である代りに素朴淸純である。そしてどの

作家も暢び〳〵としてゐて、個性が歪められてゐない。現在の収穫はよし多少の不滿を免れぬとしても、かゝる暢び〳〵とした作家には明日を期待することができると思ふ。

光風會の組織は他の俳句會とちがつて、最初から私の添削批評が主であつた。一ケ月の作品をめい〳〵に淸書して持寄ると、私がそれを一人々々、作意を聞いたり相談したりしながら朱を加へる。この方法は私のこれ迄の經驗からいふと、なか〳〵永續しにくいものであるが、光風會はいつのまにかまる三年を經た。光風會を一つの塾とすれば、塾頭としての責任が私に在るわけで、私は無論その責任は回避しないつもりであるが、添削といつても私のは餘り筆を加へない。助詞の一二字を加朱することによつて生彩の加はる場合は勇敢に朱筆を執るが原作の俳がなくなるまで、句法や語句を變へなければならぬやうな場合は、參考的に一案を示すにとゞめる。況して見方や表現を月草的鑄型にはめる

ことは意識的には無論のこと、非意識的にもさういふことの無いやうにと極力戒めてゐるのである。だからこゝに集められたものは、多く原作のまゝであつて、私の朱筆は極く僅かな部分にしか及んでゐない。各作家が修業三ケ年にしてはよく個性を生かし、從つて小人數の集としては比較的バラエティに富むのも一にそのためであると思はれる。

光風會の長所は何よりも會員の呼吸が會つてゐることである。さうして、樂しみながら苦作をつゞけてゐるといふ風の見えることである。第一輯よりも第二輯、第二輯よりも第三輯と、その収穫は石を積むやうに、次第に高くなつて行くべきことは十分期待できると思ふ。

伊東月草

凡例

一、本集は光風會創設以來三ヶ年間の會員の作品約四千句の中から再選した。

一、分類は類題とし、排列の順序は大體年齢順によつた。

一、作者たる會員は左の十一名である。

堀越龍湖　前橋芭水　大林艸丘　前橋吳喬
小崎百水　關口嘉兆　西田竹里　糸川丁苡
中尾一如　鈴木香雲　松本歌子

外に臨時會員として左の二名の作が若干ある。

山田早苗　脇田邦一

以上

昭和十四年五月

編者

目次

序……伊東月草……一
凡例……四
目次……五
春……一
夏……三三
秋……六七
冬……一一一
新年……一四一
會員小傳……一四七
光風會紀要……一五九
季語索引……一六五

春

時候

立春　爐の隅に煎豆一つ　春の立つ　芭水

海山にてる日あまねく春立てり　一如

春立つや麥とろ飯の草の宿　百水

如月　きさらぎの星影さぶく海暗し　一如

春淺し　芝焼に焦げし杭や春淺し　芭水

（春）時候

餘寒　桶のたがはねし音聞く餘寒かな　芭水

春寒　春寒し田水にうつる森の影　芭水

悼

春寒き香煙に涙あらたなり　同

座に近く鳩の遊べり春寒き　一如

渡船場や春寒う照る波がしら　同

畔掘に魚影も見ず春寒き　龍湖

岐れ路のしるしの石や春寒き　吳喬

黒髪の嶺に雪あり春寒き　嘉兆

梅咲いて春なほ寒し大師道　艸丘

花活ける指の赤さよ春寒き　歌子

悼龍湖先生夫人

白桃のはかなく散りて春寒し　百水

春の朝　つくばひの水音聞くや春の朝　早苗

春の晝　春の晝街路の塵の輪に舞へり　芭水

羅漢像暗きに在はす春の晝　吳喬

どろ龜の背のみなかわき春の晝　艸丘

（春）時候

春の宵　そよ風に庭樹のかをる春の宵　龍湖

からびぬ餅あぶる匂ひや春の宵　芭水

汐満ちて鳥の浮べり春の宵　竹里

麗か　水叩いて唄ふ子のあり日のうらゝ　芭水

麗かや蕎麥煮る鍋に夕陽さす　竹里

退け時の氣ゆるみに日の麗けき　一如

柳影うらゝかに鴨眠り居り　歌子

長閑　バス下りてしばし野を行く長閑かな　龍湖

長閑さや竹林深く鷄の聲　芭水

春めく　黑々と焚火のあとの春めけり　龍湖

日永　風呂を焚く煙の縷々と暮遲き　龍湖

暮遲し

苗賣の聲長々と暮遲き　同

鹿島香取詣でて歸る日の永き　竹里

暮遲き空のはるかに天城嶺　吳喬

移徙

（春）時候

荷納めて打水したる日永かな　芭水

春暑し

春暑くせゝらぎ匂ふ木蔭かな　芭水

行く春　春惜む

行く春の日光（ひかげ）うら〳〵海凪げる　一如

行く春の砂丘に立てば海まぶし　同

呑み古りし湯呑の錆や春惜しき　同

朝茶啜る坐邊のしめりや春惜しむ　同

沖遠き一帆に春の行方かな　丁荳

戸を繰れば一夜の雨に春の行く　同

行く春や柳に暗き河岸通り　龍湖

出る船の水泡殘して春行けり　芭水

行く春や遠き林の懸巣聽く　百水

仰向いて蛙ころころ春惜しき　竹里

行く春や雨に濡れたる青柳　嘉兆

行く春やほのと明るき持佛の灯　吳喬

行く春の山もみどりに蕨とり　早苗

夏近し

夏近し海士の焚く火の消え〳〵に　芭水

裏窓に飯櫃つるし夏近し　同

（春）時候

夏近し日毎に青む中洲岸　龍湖

池にうつる木影濃くなり夏近し　百水

夏近し利根の水嵩日毎増す　竹里

夕河岸の魚よむ聲や夏近し　艸丘

夏近き雲淡く桐咲き初めぬ　歌子

天文

風光る柳影釣る背にもつれ風光る　歌子

春光　春光や眞菰漕ぎわけ白帆行く　百水

春光や水を散らして鴨の立つ　同

海苔舟の細江漕ぎゆく春光や　艸丘

投網たぐるこべりに春の光かな　同

春光や拾へばもろき櫻貝　歌子

霞

戸を繰れば裏山かけて霞みけり　一如

鳩のまなこつぶらに野山霞みけり　同

はねつるべギーと音する霞かな　龍湖

ポッポ船沖遠く行く霞かな　艸丘

春日

鍬ふりて濠さらひゆく春日かな　龍湖

生け葱の着せ藁厚く春日さす　芭水

春月　臨月

船宿の一夜寝かねて春の月　呉喬

垣根越し風呂に呼ばるゝ春の月　同

四つ手網流れくる渦や春の月　龍湖

語り暮れしまゝに灯らずおぼろ月　一如

朧

渡し舟呼べば應へる聲おぼろ　艸丘

春の星

紙芝居路次に暮れけり春の星　百水

水に映ゆる灯影も淀み春の星　同

艪の音の遠のきゆきつ春の星　艸丘

四つ手おろして覗く水面に春の星　同

三井寺に鳥しづまりぬ春の星　竹里

春の星二子の方は曇りけり　早苗
春の星寒けく海の高鳴れる　一如
井戸替の水ひききらず春の星　芭水
鍵盤走る指影淡し春の星　歌子

春雨

かた〳〵と豆腐切る手に春の雨　龍湖
堀り殘す牛蒡萠えけり春の雨　同
春雨に浮巣けぶりて鳰の鳴く　百水
春雨に瀬戸の島々かすみゆく　同
濠端の柳ふゝみぬ春の雨　邦一

春雨や一と降りごとの芽のふゝみ　同
追はれつゝ家鴨かしまし春の雨　一如
甃夜目にも白し春の雨　同
苫舟の炊煙低し春の雨　艸丘
枯芝の底の青みつ春の雨　同
きざはしに鷄ぬれて寢る春の雨　丁苡
晴間見て鷄舍閉めに行く春の雨　同
棕梠竹の埃うたせぬ春の雨　芭水

地理

春の野　春の野は一雨ごとに緑増す　竹里

閉ぢしまぶたになほ陽の透ける春野かな　歌子

焼野　野火あとに赤き草の芽萠えにけり　芭水

雪解　雪解くる小川のほとり芹青き　吳喬

雪解の雨だれしげし大藁家　同

菜に交る葱はれば雪解水　同

街道は一直線に雪解かな　一如

バス並ぶ驛前廣し雪解風　同

泡立てて小川溢るゝ雪解かな　龍湖

芽の張りし枝わたるなり雪解風　芭水

桃の枝赤し雪解の多摩河原　百水

洗ひ髪陽を吸ひなびく雪解風　歌子

春泥　春泥に星影きらと光りけり　龍湖

春泥や轍に見ゆる月の影　百水

春泥を踏み九皐に鶴の鳴く　艸丘

春泥や徒歩へば寒き宵の月　一如

芝居小屋はねて春泥ひそかなり　歌子

春の水

鶴折りて流し連るゝや春の水　芭水

道沿ひの河原行くなり春の水　同

枕して聞く款乃や春の水　吳喬

兩岸に溫泉宿並びて春の水　同

桃色に雲の映れり春の水　早苗

菜一葉流れ來にけり春の水　同

春の水砂利積舟のかろやかに　百水

濠の底に水草青む春の水　竹里

春の水石動かせば雜魚の散る　艸丘

釣人の背のまろまろと春の水　一如

水溫む

摘みし菜を洗ふ水より溫みけり　龍湖

枯蘆のすく〳〵と水溫みけり　芭水

雜魚掬ふ手網の光や水溫む　艸丘

人事

目刺　目刺焼くやまつはる仔猫追ひながら　歌子

入日さす露次ざわ〳〵と目刺焼く　同

目刺焼くけぶりたゆたふ灯影かな　一如

目刺干せば浦風松葉落しけり　艸丘

目刺焼く煙ゆらゆらと路次の晝　百水

いさゝかの目刺干したり船世帯　吳喬

爐塞　悼

爐塞ぎし夕べ術なう坐り居る　一如

摘草　濡れ佛立たせる許の草を摘む　龍湖

田打　田を打つて水口の堀埋めけり　芭水

畑打　畑うつや見上ぐる山の塔小さき　龍湖

春日傘　麥青くげんげの盛り春日傘　芭水

春日傘湖を隔てゝ榛名富士　百水

春日傘散る花びらを受けて行く　歌子

動物

歸雁

雨脚立つ空をはるかに雁歸る　龍湖

土落す鍬の光れり雁歸る　芭水

明ける星一つかゞやき雁歸る　艸丘

利根の水日毎に増して雁歸る　竹里

夕煙ひろがる涯を雁かへる　歌子

鳥の巣

鳥の巣や晝なほ暗き藪だたみ　龍湖

船つなぐ利根の草間の雲雀の巣　竹里

雲雀

山頂を夕陽のすべり雲雀鳴く　芭水

麥の穗を拔きすてゝあり鳴く雲雀　同

揚雲雀眼下に小さく囀れる　一如

揚雲雀筑波おほらかに晴れて居る　同

瞬けばたゞ雲白し揚雲雀　龍湖

雲雀籠日向に向けて吊しけり　早苗

城下街さびれゆくまゝ揚雲雀　百水

牛の背に陽炎燃えて雲雀鳴く　歌子

燕

雲切れて日射す舗道や濡れつばめ　歌子

電線に露照り走り夕つばめ　同

ひら〳〵と木の葉と見しが燕かな　龍湖

鎌倉吟行

早苗田に影落しゆく燕かな　艸丘

囀り囀りや障子に動く竹の影　芭水

野の雲雀麥は見せず囀れる　艸丘

囀りに今朝の晴れ知る寢覺かな　一如

蝶　瀧しぶき五彩と散るを蝶のとぶ　百水

春の蚊　ついと飛ぶ春の蚊の灯に透きとほる　歌子

飲みさしの麥藁を春の蚊がめぐる　同

釣瓶たぐれば春の蚊の鳴く井戸暗し　龍湖

春の蚊のしづかに影を落しゆく　百水

茶をいるゝ頬に春の蚊とまりけり　芭水

蛙　雨けづく初更の空や鳴く蛙　龍湖

よべの雨に山田あふれて鳴く蛙　同

裏川に蛙鳴く夜を讀みはずむ　一如

淺蜊　穴守の詣で歸りの淺蜊かな　竹里

蜆　苞味噌の日向くさゝよ蜆汁　芭水

寒む空を戻ればにほふ蜆汁　歌子

植物

梅

日溜りに咲き匂ひをり野路の梅　百水

盆梅に水滴の水さして寢る　一如

今朝ほつ〳〵咲き初めし梅に口すゝぐ　歌子

木の芽

木の芽和へ作る手元に夕陽さす　歌子

朝立ちの山路の木の芽香に滿ちて　同

うす紅の芽も露ふゝむ雜木山　同

枯れにしと思ひし柘榴芽吹きける　芭水

雪解けて木蓮の芽のあらはなり　竹里

揚げ舟の陰うらうらと茱萸芽ぐむ　一如

木瓜の花

濱へ下りる道の細さよ木瓜の花　一如

椿

夜霽（よあがり）の門べにこゝだ落椿　一如

桃

見えぬほどの雨けぶりをり桃すもゝ　歌子

山吹

夕隈に山吹の浮く雨戸引く　芭水

（春）植物

たわみ咲く山吹に水掬びけり　同

よべの雨池濁したり濃山吹　一如

洗面器井端に白し濃山吹　同

讀み疲れし目に山吹のゆれて居る　歌子

山吹に陽のあふれ居り撒水車　同

茶を啜る外山吹の雨しげき　竹里

垣間洩る落日に映えて濃山吹　百水

門前に濡れ荷解きたり濃山吹　丁苡

菜の花

こぼれ菜のかつぐ咲けり畔の道　歌子

雨あしの細く光れり花菜畑　同

紫雲英

げんげ田や夕べ蛙のきそひ鳴く　歌子

かまくら吟行

げんげ田をめぐり山々けぶり居る　同

同

堀られたる土一くれにげんげ咲く　艸丘

下萠

草萠

薬師寺は昔ながらに草萠ゆる　芭水

土手降りて磧そこゝ下萠ゆる　同

（春）植物

海沿ひの新道白う下萠ゆる　一如

忘れられし毬幾日か下萠ゆる　歌子

蕗の薹

藪の奥の小社古りぬ蕗の苔　龍湖

芹

芹生ふる湧水ぬくゝ濯ぎけり　芭水

世をうとみひとり野に來て芹を摘む　歌子

夏

時候

立夏　用水に夏立つ朝の目高浮く　龍湖

井戸端に柿の實生えて夏立てり　芭水

夏立つと曉ごとの散歩かな　艸丘

梅雨　梅雨寒の膳に向ひて朝餉待つ　一如

短夜（明易し）　短夜のしらむ稍に烏鳴く　龍湖

短夜の外山いつしか白みけり　同

（夏）時候

秩父連峰薄墨に明易きかな　竹里

明易き靄の上れば五位の聲　同

明易し客去りしまゝの枇杷の皮　歌子

元村入港

明け急ぐ島の灯ゆれて賑はしき　同

短夜や明日の社日の小豆煮る　芭水

鳥の聲ちゝと聞えて明易き　同

短夜の山陰暗く溫泉に浸る　百水

明易き濱邊さやけく潮澄めり　一如

ほの見ゆる三原の煙明易き　竹里

夏めく　雲の迅さ島山かけて夏めきぬ　一如

暑さ　片影を縫ひゆく道の暑さかな　艸丘

濱茶屋の夕凪時の暑さかな　百水

別府行

ひたむきに彈く程に暑さ忘れけり　歌子

草の葉の風に撚れ立つ暑さかな　芭水

涼し　涼しさや湖面にゆらぐ山の影　龍湖

（夏）時候

涼しさや更けゆく空の遠花火　同

枕邊に蟀とんで朝涼し　香雲

秋近し　秋隣

秋近し馬の嘶く牧の方　龍湖

桑摘んで畑明るう秋近き　同

悼前橋耕圃翁

蘭深く白蓮散つて秋近き　同

潮の泡浪なりに消えぬ秋隣　一如

秋近き宵のばけつに蟹あがく　同

厨べに南瓜重なり秋隣　同

秋近し太りて青き桔梗の實　芭水

立つ浪の日毎けはしう秋近き　百水

天文

南風　南風強く萎ゆる花壇に灌ぎけり　芭水

鳶一羽横に流るゝ大南風　艸丘

明け方の引く網かろし南風　早苗

南風隣の煤の吹き込みぬ　嘉兆

潮の香のたもとに満ちぬ南風　歌子

青嵐　道者續く谷の小路や青嵐　龍湖

遠嶺の瀧隱見す青嵐　百水

浮く鯉のさつと沈みぬ青嵐　艸丘

青嵐鎭守の峰に陽の殘る　吳喬

盥いつぱいしやぼんの泡や青嵐　歌子

雲の峰　風呂煙の桐に流れて雲の峰　龍湖

安房の山低く連らなり雲の峰　同

網をうつ網の中にも雲の峰　竹里

果てしなき梨園の彼方雲の峰　同

筑波嶺に重なり立てり雲の峰　芭水

雲の峰橋越ゆる間にくづれけり　艸丘

夏の空　うたゝ寢の覺めてまばゆし夏の空　芭水

夏の空浮び出でたる青葉城　百水

水際のポプラ吹かれつ夏の空　歌子

夏の雲　傘借りて來しが晴れたり夏の雲　龍湖

雷　落雷に人家草木みな震ふ　艸丘

夕立　夕立にぬれて刈草いきれけり　竹里

沛然と沖夕立ちて波光る　同

夕立の後のすがしさ海照れる　一如

夕立に出水ひろごり富士見ゆる　同

夕立に池あがりくる家鴨かな　芭水

夕立に茄子漬きごろの膳立つる　歌子

炎天　炎天を行く兵達の汗白し　艸丘

朝顔の翌の蕾や炎天下　同

炎天に流れ灌頂乾きけり　龍湖

炎天にふつ〳〵と沸く田水かな　芭水

炎天に畑一面の茄子光る　竹里

炎天の大地ゆすりてタンク行く　歌子

日盛

日盛やとかげの遊ぶ甃　龍湖

渚行く日傘眞白し日の盛り　百水

旱

旱空淵の底まで見え透きぬ　龍湖

今日も亦雲の流れて旱かな　同

月涼し

碁を圍むそびらにすゞし月のぼる　一如

地理

夏山　夏山や男瀧女瀧の七五三見ゆる　龍湖

夏野　夏野盡きて柳に暗き橋一つ　龍湖

沼さして一鳥飛べる夏野かな　芭水

鵜竿の四五本動く夏野かな　艸丘

放し駒三つ四つ見えて夏野原　百水

夏の川　夏川に御輿もみ入る祭かな　龍湖

苗代　富士見えて苗代の水あふれけり　一如

人事

幟　山越しの風にはためく幟かな　芭水

大利根の眞菰の中ゆ鯉幟　竹里

菖蒲葺　つばくろの戸塚の宿はあやめ葺く　艸丘

更衣　暖簾くゞれば風呂のにほへり更衣　吳喬

髪結うて花活けてみつ更衣　歌子

日傘　築地河岸ひそけき午を日傘ゆく　百水

岸をゆく日傘映して湖晴るゝ　同

日傘さして見る御神樂や臨時祭　吳喬

繪日傘を持ちたるまゝに寢入る兒よ　同

繪日傘の彩る影に鯉くるふ　丁苡

石段に影濃く日傘むつびゆく　歌子

青簾

燈臺の遠く灯れり簾捲く　歌子

雨すぎて夕顏にほふ青簾　同

夏痩せて友うつくしう青簾　同

屋形船の提灯ゆれて青簾　芭水

簾越し物賣呼べり退く日脚　同

祭衣を掛けし衣桁や青簾　龍湖

離室（はなれ）より煙の影來る青簾　吳喬

青簾蟹と遊べるあねいもと　一如

葭簀

浦風の松葉をこぼす葭簀かな　艸丘

扇

一文字に袴結べり扇さす　芭水

團扇　京團扇持つ手かぼそく病みほけぬ　一如

衣紋竹　衣紋竹はた〳〵と夕汐滿つる　歌子

衣紋竹開け放ちたる青疊　同

朝蜘蛛の走る鴨居や衣紋竹　芭水

衣紋竹にかけある浴衣窓を掃く　百水

衣紋竹軒端に朝の海凪げる　一如

夏帽子　道すがら桑實を摘みつ夏帽子　芭水

朝の晴れ夏帽の微拭ひけり　一如

夏帽子振りつゝ舟の遠ざかる　歌子

納涼臺　一しめり欲しき宵なり納涼臺　一如

蚊帳　病める蚊帳にまぶしう雲の去來見る　芭水

竿に宿るよべの雨切り蚊帳を干す　同

陶枕のにぶく光りて蚊帳涼し　一如

蚊遣　しばらくは厩へあふぐ蚊遣かな　龍湖

蚊遣たくや庭はうすらに月の照る　芭水

蚊遣の香ほのかに髪を刈らせけり　一如
蚊遣たくこの一村に暮色濃き　艸丘
蚊遣たく老の背に月ほのかなる　歌子

麥刈　麥秋

すくも火に庭掃きよせぬ麥の秋　芭水
隣り田に石灰撒けり麥を刈る　同
煙り立つ家路いそ〳〵麥刈れり　歌子
夕告ぐる鐘しづかなり麥の秋　同
麥秋や釜浸しある井戸流し　龍湖
雨がちの鎮守祭や麥の秋　竹里

動物

蛞蝓切　行々子

夕燒の蘆原ひろし行々子　百水
大利根や涯なき岸の行々子　同
濱風のはたと凪ぎけり行々子　芭水
舟宿に蛞蝓切鳴いて水青し　竹里
流れゆく撫子光り行々子　歌子

蝙蝠

蝙蝠に掛行燈の灯の暗き　龍湖

（夏）動物

ぎす　蚊帳たゝめばひやり頬打つきり〳〵す　歌子

雨蛙　枝蛙　枝蛙鳴いて桑の葉光り居る　百水

枝蛙鳴けり芭蕉の昏の雨　同

雨蛙鳴くや學童濡れて行く　艸丘

雨蛙ひた鳴きに峽田暮れんとす　一如

枝蛙しきりに合歡の花暮るゝ　歌子

蠅

蠅肩につけしまゝ船を上りけり　芭水

茄子の葉に蠅の動かず濡羽干す　同

入日さす船ばたに蠅集れり　竹里

蚊

讀みさして灯入るゝ間を蚊の飛べり　芭水

石窪に水のたまりて蚊の舞へる　同

佛殿の疊つめたく鳴く蚊かな　竹里

顔洗ふ湯殿小暗く蚊の舞へる　一如

蝸牛

蝸牛に籬の青葉伸びにけり　嘉兆

蝸牛の角をふり〳〵胡瓜の手　百水

雨霽れの樹洩れ日あつし蝸牛　艸丘

（夏）動物

夕あがり掌に蝸牛をなつかしむ　一如

螢

籠振つて螢の數をかぞへけり　龍湖

螢籠寢起の緣に光りけり　芭水

螢火の葉陰に碧し雨後の闇　艸丘

螢火に持佛の扉閉しけり　丁苡

ピアノ閉づれば夜は更けぬらし螢飛ぶ　歌子

紙魚

抽斗の隅にかくれぬ紙魚一つ　嘉兆

紙魚の跡もなつかしく古き日誌繰る　歌子

金魚

金魚鉢に雨後の葉雫落ちて居る　歌子

金魚すくふ子等の頰映え店灯る　同

睡蓮の一ゆれゆれて金魚浮く　嘉兆

晝昏き部屋の奥なる金魚かな　百水

聲高に廊過ぎけり金魚賣　竹里

灯取虫

灯取虫をとゝひ來いと投げにけり　龍湖

灯取虫麥酒の泡にもがきけり　同

植物

松落葉　干飯を小鳥つゝきぬ松落葉　芭水

解く帶の上に落ちけり松落葉　同

吹き渡る磯風暮れて散る松葉　百水

緣端に薄茶くみけり松落葉　嘉兆

みたらしに漣立てり松落葉　一如

沖ははや晴れて帆走る松落葉　歌子

若楓　若楓すがしく朝の風渡る　一如

開放して朝の茶立てぬ若楓　同

晝寢する緣にゆさ〳〵若楓　竹里

若楓峰は朝日に輝きて　百水

雨しとゞ濡れて色濃き若楓　艸丘

溫泉の宿の廊下に暗し若楓　龍湖

新樹　家廻り新樹まぶしき障子閉づ　一如

新緣　新緣の山に向うて謠ひけり　同

裏山の新樹香ぐはしき朝餉かな　艸丘

青葉　鎌倉吟行

のぼりつきて海のはろけし青葉風　一如

夏柳　夜あがりの舗道すがくし夏柳　一如

茂り　葭戸より煙の洩るゝ茂りかな　龍湖

若竹　草の戸やゆれて露降る今年竹　龍湖

青梅　實梅　實梅賣おとなふ書を一人居る　一如

掃きためし實梅こゝだく朝の雨　同

青梅をちぎる聲して空晴るゝ　百水

青梅の茂み小暗く蛾の飛べる　歌子

卯の花　捨て水に卯の花流れ寄りにけり　芭水

花過ぎし出茶屋の跡や卯つ木咲く　同

卯の花のこぼれては雨に流れけり　艸丘

木下闇卯の花白く浮みけり　同

下を行く傘に卯の花こぼれけり　龍湖

水引いて土に埋みぬ花卯つ木　竹里

素謠に卯の花月夜更けにけり　歌子

百日紅

金佛に鳥糞白しさるすべり　龍湖

百日紅燃ゆる碧空雲遠し　百水

捨石に觸るればあつし百日紅　艸丘

山梔子

灯明りにくちなしにほふ門邊かな　一如

紫陽花

紫陽花の凋みそめたるあはれなり　吳喬

紫陽花の毬たわゝなり雨の門　一如

晝顔

晝顔の淡紅見えて靄晴るゝ　歌子

晝顔に丘はひそけし小糠雨　同

晝顔や踏切番の旗のかげ　艸丘

振りおろす鶴嘴の下の晝顔や　同

晝顔や土堤に傾く普請小屋　龍湖

晝顔やのびし蓬に交り咲く　芭水

砂白き岸に晝顔纏ひ咲く　竹里

露含む道邊の葦に晝顔が　百水

晝顔に雲垂れこめぬ都府樓趾　嘉兆

青芒　谷底に人影見えて青芒一如

折を詰り開けば風の冷たし青芒　同

富士箱根はろに霞めり青芒　同

鎖しゝ樋を洩る水音や青芒　龍湖

岨道や笠に分けゆく青芒　芭水

風一陣高波うてり青芒　嘉兆

瓜提灯に照られて青き芒かな　百水

青芒はるか夕富士むらさきに　艸丘

磯風をまともに涼し青芒　竹里

漕ぎ下る流れまばゆし青芒　歌子

帚草　糠雨の玉と宿れり帚草　芭水

赤蟻の土くひ上げぬ帚草　同

朝露の鈴なり光る帚草　艸丘

たくましく立つ帚木や鰯雲　同

山遠く帚木そよぎ露散らす　百水

御山せし白衣も干せり帚草　丁苡

夏草　夏草にまじりて野茨香りけり　龍湖

暁の牛乳しぼる見ゆ夏の草　歌子

花菖蒲　幔幕を四囲にめぐらし花あやめ　吳喬

蓮　水玉のこぼるゝ音す蓮開く　龍湖

蓮の雨玉と凝りては飜れけり　芭水

朝靄の晴れゆくしゞま蓮開く　艸丘

夕月の光増しゆく蓮のつゆ　歌子

茗荷　行水に濡れて茗荷のつや〳〵し　龍湖

秋

時候

今朝の秋　蚊帳を干す陽色も澄みて今朝の秋　艸丘

秋の聲　窓あけて見れば月のみ秋の聲　龍湖

秋澄む　桝形城趾にて

多摩河原眼下に展け秋澄める　一如

秋高し　秋高し沖ゆく船の煙のはて　艸丘

秋高し張る紅絹壁に映り居る　歌子

登戸吟行

弘法の松年古りて秋高し　嘉兆

殘暑　秋暑し

纐の雫光れる殘暑かな　百水

街路樹のほこりに白き殘暑かな　同

縁側のきびしく光り秋暑し　一如

高々と湯桶積まれて秋暑き　同

柳瀬川行

渇き覺えつ斑猫と歩む秋暑し　歌子

秋の夕　秋のゆふべ栗拾ふ子の聲近し　龍湖

秋の暮　味噌豆を煮る香の高し秋の暮　芭水

門出れば風の齒に沁む秋の暮　同

朝寒　朝寒の鷗飛び交ふ船の上　嘉兆

夜寒　一輪の茶の花に讀む夜寒かな　一如

ひとり讀む灯の青白き夜寒かな　同

稍寒　稍寒し白衣よごれし地藏尊　嘉兆

秋寒　葭の葉に汐あと殘る秋寒し　百水

冷やか　冷やかに更くる灯のもと藁うてる　歌子

漢口陷落

冷え　し手に老も稚きも灯を振れる　同

平林寺吟行

秋冷の杉木立行く苔の色　同

夕餉濟みし縁ひやく〳〵と障子貼る　芭水

朝まだき蛇口の水の冷やかに　同

冷やかに洩る日の細き杉林　龍湖

冷やかに橋行く人の眞向きに　艸丘

ひや〳〵とあたり暮れきつ立話　一如

瑞泉寺扉しまりて冷かに　香雲

行く秋

床上のいつとはなしに秋の行く　龍湖

秋行くと舟底干しぬ川岸の家　同

行く秋の汐滿つる聲に鷗飛ぶ　竹里

せゝらぎへ落葉輪をかき秋の行く　同

行く秋の閼伽に散り澄む青松葉　丁亥

行く秋の船影に帆をつくろへり　同

立つ鳥の木の葉落して秋の行く　百水

瓢乾す寺の廂や秋暮るゝ　吳喬

行く秋や山と積まれし炭俵　嘉兆

颱風の後

屋根塞ぐ菰の吹かれつ秋の逝く　芭水

漢口陷落

行く秋の野の賑かに旗の波　歌子

冬近し　冬隣り

冬近き舗道つめたし影法師　一如

暮れぬ間に隣とざしつ冬近き　同

日向ゆく學童の影冬近し　同

護謨樹の鉢夜毎取込む冬隣　同

里は雨峰に雪見ゆ冬隣　龍湖

冬隣芒の穂絮みな飛べり　芭水

大釜に味噌豆仕込み冬近き　吳喬

冬隣籾挽く音の遠くより　竹里

蓼の葉に日の色錆びて冬近き　歌子

天文

初嵐　から〳〵と鳴る桐の實や初嵐　芭水

もろこしの葉ずれさやけし初嵐　艸丘

一輪の朝顔殘り初嵐　吳喬

初嵐笹舟と共に走りけり　竹里

佇めば海ひろ〴〵と初嵐　一如

帆の蔭に米炊ぐ見ゆ初嵐　歌子

野分　浪あらく利根の野分の果しなき　竹里

秋風　秋風に街のピエロの眞顔なる　歌子

秋日　秋の日の舟板あつく鯊を釣る　艸丘

秋日和　もぎ殘る一口茄子に秋日澄む　同

柳瀨川吟行

秋日澄む欅並木の空高し　同

芋蔓を返す人見ゆ秋日和　龍湖

柳瀨川吟行

秋の日や畔もろこしの穂の太き　同

（秋）天文

秋の日の俄かに暮れて五位の聲　百水

弘法の松を訪れて

蕎麥の花秋日に白し蝶の飛ぶ　同

風折れの樹肌あらはに秋日すむ　歌子

柳瀬川吟行

川上る裸兒に秋日きら〳〵と　同

秋晴

秋晴の湖廣々と山羊遊ぶ　百水

山の背に黍の葉枯れて秋晴るゝ　同

秋晴や供華新らしき六地藏　龍湖

犬蓼の花赤々と秋晴るゝ　龍湖

秋の雷

柳瀬川吟行

はらわたに井水の沁みつ秋の雷　一如

秋の空

秋の空入日を遠く汐滿ちぬ　竹里

弘法の松を訪れて

秋の空小さき凧のあがり居る　艸丘

同

落葉たく煙の白し秋の空　百水

同

杉木立冷えぐゝと秋の空晴れぬ　歌子

月

待つ月の空しく謠はじめけり　一如

門司の歸途山口樓にて

月清し燈臺光る和布刈崎　芭水

三日月

垣越しに訪ふ親しさや三日の月　吳喬

夕凪の三日月淡し糸とんぼ　同

鍬淡ふ波紋にゆらぐ三日の月　龍湖

入汐に馬洗ひけり三日の月　艸丘

山黑く溪水白し三日の月　嘉兆

兵を送る

歡乎まだ耳に殘れり三日の月　歌子

名月

無月

堤を行く人聲更けぬ今日の月　龍湖

芋團子無月ながらに供へけり　一如

天の川

銀河

宵宮の囃子の冴えて天の川　艸丘

棟上げの幣束白し天の川　同

露次出れば果なき廣さ天の川　龍湖
露こぼす星かはためく天の川　芭水
滿天の銀河こぼれて虫しぐれ　百水
一筋に故郷へ通ふ天の川　竹里
輪になつて子等唱ひ居り天の川　歌子

秋時雨

洛北愛宕山登山

秋時雨杉の枯葉の交り降る　芭水

秋雨　秋雨に岸の柳の五位鷺濡れて　百水

秋雨に中洲けぶれり鷺の飛ぶ　同

遠神樂ひねもす聞ゆ秋の雨　龍湖

北野神社

灯ゆるゝ柳のかげや秋の雨　芭水

地理

秋の海　島山の影暮れそめて秋の海　艸丘

眞ッ晝の濱に人なし秋の海　同

藻屑燒く人影暮れて秋の海　百水

朝靄に蝦かく人や秋の海　同

彫りしごと海女立ち暮るゝ秋の海　歌子

指すべる砂冷々と秋の海　同

朝燒に出船いさましし秋の海　一如

初汐　葉月汐　初潮に船を洗うて月の濱　竹里

岸ほとり晩鐘聞きつ葉月汐　同

初潮に干汐の蟹の逃げまどふ　百水

落し水　鍬のあと土にてるなり落し水　芭水

馬入れ道土やはらかに落し水　同

落し水夕燒雲のうつくしき　艸丘

稻株のゆらぎ流るゝ落し水　嘉兆

子等五六網を手に〳〵落し水　竹里

落し水小さき渦に木の葉舞ふ　吳喬

山の端にはや日の落ちぬ落し水　百水
咲きたるゝ水引に鳴る落し水　丁荳
落し水なびける草の光り居る　歌子

秋の水

京都北白川にて

秋の水廻して門の石積める　芭水

柳瀧川吟行

ひろごりし網にきらめく秋の水　百水

露

大佛のいまだ日ざさず露しとゞ　一如

犬を呼ぶ口笛高し露の原　同
玉砂利の露きら〳〵と日ざし來つ　同
逗子葉山灯のつらなれる露夜かな　同

身延山

菩提梯三百階の露寒き　同
夕露に塵たく煙たなびきぬ　龍湖
朝露に仔犬の濡れて戻りくる　同
夕露に大根ぬく手のすべりけり　同
夕露や踏む枯草の音もなき　芭水
鉢直す袖にこぼるゝ露寒き　同

洛北愛宕登山

風毎に露しぐれしつ杉木立　同

露つらぬし蜘蛛の巣に空は澄み渡り　歌子

細々と行く手は遠し露葎　同

朝露に裾ぬらす龍膽咲けり　百水

芋の葉の傾ぎて重し露しとゞ　吳喬

人事

秋祭　揉み上げて芋丸々と秋祭　龍湖

颱風去つて隈なき月の秋祭　艸丘

秋祭蕎麥挽く音の草家より　百水

群れ外れし提灯一つ秋祭　歌子

秋の袷　鶏頭に降る雨しげし秋袷　一如

浪と遊ぶ子どち賑かに秋袷　同

たまさかの家居うれしき秋袷　同

ちろり待つ爐火うとからず　秋袷　芭水

樟の香のさと鼻うてり　秋袷　同

藥湯のぬくみ親しく　秋袷　龍湖

見送れる肩骨ばりて　秋袷　歌子

扇置く夕風に草の實鳴れり　扇置く　歌子

秋の蚊帳
蚊帳名殘

時化あとの月もるゝ蚊帳の名殘かな　龍湖

裾の蠟もみ落しけり　秋の蚊帳　芭水

月白き祭囃子や　秋の蚊帳　百水

秋の蚊帳窓一杯に干されたり　一如

花火盃に花火映しつ酌み交はす　百水

枝豆に話はずみつ花火舟　同

山越しに打上花火見ては酌む　一如

灯影なき丘賑かに遠花火　同

潮騷も馳れしつれ〴〵の花火かな　歌子

大鳥居闇に浮びて花火散る　同

田面より來る風ぬくし夕煙火　芭水

動物

雁

宵闇の空低う過ぎぬ雁の聲　嘉兆

大空に雁の一聲澄みにけり　同

雁の來る朝ひやゝかに手紙とる　竹里

鵙

落胡桃探す葎や鵙の聲　芭水

百舌鳥鳴いて梢の高し平林寺　艸丘

柳瀬川吟行

橋下にまぶし洗へり鵙の聲　一如

法師蟬

柳瀬川吟行

野井汲めばつく〳〵法師つと逃げぬ　歌子

蜻蛉

杖ふれば杖にまつはる蜻蛉かな　一如

溪間の朝晴れをとべり赤とんぼ　同

柳瀬川吟行

照りかげる堤の長し赤蜻蛉　同

平林寺吟行

秩父連峰うす日にかすみ赤とんぼ　同

（秋）動物

驟雨に蜻蛉疊を打つて來る　吳喬

秋の蝶

山霧の流るゝ迅さ秋の蝶　一如

眼の前に富士晴れ渡る秋の蝶　同

谷の底けぶりて見えず秋の蝶　同

干し草の日の香浴び來つ秋の蝶　芭水

野火止所見

麹干すけむりに秋の蝶そるゝ　同

荒磯の上行く秋の蝶一つ　艸丘

秋の蝶朽葉舞ひくる如くにて　同

日もすがら照り昃る野に秋の蝶　吳喬

秋の蝶雲なきまゝの入日かな　同

秋の蝶追ふ子等露にぬれながら　歌子

蝗

隣村と知らず來過ぎぬ蝗とり　龍湖

稲舟のへさきを游ぐ蝗かな　芭水

蝗とる子供の群に夕日さす　百水

畔行けば袖にとびつく蝗かな　艸丘

蟲

書に飽きて聽き耳立てつ蟲の聲　嘉兆

（秋）動物

雨のやむけはひに蟲の聲冴ゆる　一如

馬追（すいと）

澄む空はしたゝるばかりすいと鳴く　芭水

足一つ袋に殘しすいと飛ぶ　同

馬追の小籠かたへに手紙かく　一如

どこやらにすいと鳴きすみ門灯る　同

半窓の灯影明るうすいと鳴く　龍湖

栗燒けば爐端近くにすいと鳴く　艸丘

馬追に庵の釜はたぎり居り　吳喬

馬追のしきりに鳴けり蚊帳のうへ　嘉兆

運ぶ針の更けてつめたしすいと鳴く　歌子

蟋蟀（ちゝろ）

こほろぎや狹間に隣の火影さす　龍湖

破目穴に鳴く蟀の髭動く　同

蟋蟀の鳴けり糊煮る粗朶の下　芭水

蟋蟀の風呂に飛入る影さむし　竹里

こほろぎの鳴きはじめたりよい月夜　香雲

とぎれ勝ちのちゝろに厨明けてゆく　歌子

草雲雀　平林寺吟行二句

晴れ渡る空を葎の草雲雀　百水

草の香にしばし憩へば草雲雀　歌子

きち〳〵　柳瀬川吟行

投網見つゝ休めばきち〳〵ばつた飛ぶ　歌子

秋の蚊　据風呂の焚口に殘る秋蚊かな　竹里

植物

桐一葉　朝疾く釣瓶手繰りぬ桐一葉　芭水

聞き馴れし鐘のひゞきて桐一葉　同

反故燃ゆる煙ゆれきぬ桐一葉　嘉兆

水打てばさりと落ちぬ桐一葉　同

桐一葉茶店のあとの水溜り　吳喬

久に降る雨音高し桐一葉　一如

桐一葉外明りたのむ厨口　歌子

（秋）植物

柳散る　水燈みて底石白し柳散る　竹里

濠痩せて水の低さよ散る柳　同

釣舟の淦汲む音す散る柳　龍湖

百舌鳥立ちしあとをしばらく散る柳　同

御詠歌のしばし聞えて柳散る　芭水

灯の遅き街角寒し柳散る　呉喬

木母寺や昔ながらの柳散る　嘉兆

實柘榴　ざくろの實赤味さし來つけぶる雨　一如

木槿　誰やらん笠かけ捨てゝ木槿咲く　龍湖

花はちす　朝靄に野道けぶれり花はちす　百水

夕月の門に音なく木槿散る　艸丘

木魚洩るゝ寺の籬の木槿かな　竹里

木槿白し露にぬれつゝ明けにけり　呉喬

母と娘の向ひて縫へり花木槿　歌子

木犀　ほのかなる木犀の香に事務をとる　一如

柿　柿喰へば日の暮はてし海荒るゝ　丁荳

（秋）植物

弘法の松吟行

鐘鳴れば冷えくる道や柿たわゝ　同

澁柿を地になげつけつ山暮るゝ　香雲

谷の靄深うしづもり柿熟るゝ　同

猫の背に置く影さむしつるし柿　吳喬

谷間梯西日を受けて鳥むつぶ　竹里

掃寄せの煙眞直ぐに柿熟るゝ　百水

一ところほのと灯して柿靄ぐ　一如

桔梗　墨すれば机上の桔梗傾ける　歌子

蜘蛛一つ糸かけ初めぬ花桔梗　同

桔梗履むで淺間の煙仰ぎけり　艸丘

疎なる松の下道桔梗咲く　百水

芙蓉　色とり〴〵雨にぬれたる芙蓉かな　一如

菊　菊白し手洗ふ窓の夜の隈　芭水

賀

松青き下に構へぬ菊の花　同

平林寺行

空低う傘なき人の菊に行く　同

茶をたてる一間しづかに菊薫る　歌子

そこはかとなき菊の香に彈き澄める　同

先生の御全快を祝ひて

霧晴れて山すが〳〵し菊日和　同

市松の障子明るう菊咲きぬ　龍湖

中村博士新宅の賀

菊咲くや不二と並んで棟高き　同

菊活けて爐縁の塵を拂ひけり　百水

明けやらぬ狹霧に庭の菊おぼろ　同

胸に挿す菊花眞白に征く兵士　一如

朝靄に汽笛するどく菊咲きぬ　同

青竹の手摺ひやりと菊咲ける　艸丘

米かしぐ音の暗きに菊にほふ　吳喬

一反の畑ことごとく黄菊なり　竹里

萩

萩にふれ野菊にふれて山路ゆく　龍湖

踏切にけむるこんろや秋ざくら　龍湖

こすもす　秋櫻

こすもすのゆるゝ間をとんぼ離れ澄む　艸丘

野菊　瀧壺のひゞきにゆるゝ野菊かな　吳喬

露に伏す野菊に落陽たゞよへり　歌子

露草　露草に覆はれて丸き力石　龍湖

鶏頭　起す手に雞頭の種子こぼれけり　芭水

寺門深く雞頭靜かに暮れてゆく　同

雞頭に香煙流る濡れ佛　龍湖

魚飛んで水輪にうつる雞頭花　吳喬

葉雞頭（かまつか　雁來紅）　草屋根の簷傾きて雁來紅　百水

山里はかまつかに雲の去來する　同

かまつかに出征の旗立ち並ぶ　嘉兆

かまつかの紅ふかく雨あがる　同

葉雞頭踏切番の旗白き　龍湖

住む人のなくかまつかの濡れて居る　歌子

木の實　拓本を取る墨の香や木の實落つ　芭水

晩稲　晩稲（おくて）刈る鎌の光りて鵙叫ぶ　百水

蕎麥の花　たゝなはる山脈さやに蕎麥の花　一如

芒　穂芒のこの道塞ぎ富士澄める　丁苡

暮れてゆく空の佗しさ芒剪る　同

舊道は名のみに殘る芒かな　芭水

穂すゝきの綿吹き散つて野は寒し　艸丘

歡送の人去り芒そよぎ居る　一如

桝形城趾にて

昔しのぶよすがもなくて芒散る　歌子

末枯　見るごとに鉢の楓の末枯るゝ　嘉兆

末枯に追へども飛ばぬばつたかな　同

苦なめらかに木賊の群の末枯るゝ　芭水

末枯の茅野の原に夕燒けつ　百水

冬

時候

立冬　境木の冬立つ畑に目立ちけり　龍湖

冬立つや南天の實に小鳥來る　芭水

冬立つや木斛の實の赤味さす　吳喬

冬立つ日八聖殿に詣でけり　竹里

朝晴れの潮騷高く冬立てり　一如

小春　小春日の菊を賞でつゝ茶をすゝる　百水

雜木影肩に背に行く小春かな　歌子

短日　暮早し

短日や干したる夜具の匂ふなる　芭水

短日の焚火あかりに馬入るゝ　同

短日や舗道に引ける人の影　嘉兆

短日の大根引く手に月がさす　同

短日の窓に全く丘枯れぬ　丁苡

船頭甚四郎の戰死を吊ふ

短日の浪音に袴たゝみけり　同

昃りゆく麓の村や暮早き　龍湖

子ろ戻る寒き麥の暮早き　竹里

いとま告げれば八つ手ほのかに暮早き　歌子

冬の夜　冬の夜や足袋を仕立てる槌の音　芭水

冷たし　ふと觸れし柵のつめたさ兵送る　歌子

寒さ　壁穴に笹の葉見ゆる寒さかな　龍湖

撒き水の敷石すべる寒さかな　芭水

除夜　火鉢の火消えがてに除夜の鐘をきく　一如

（冬）時候

行く年　こゝかしこ炭切る音に年暮るゝ　百水

師走　炭を切る音に出て見る師走かな　芭水

寒の入り

寒の入り裏山に竹伐る音す　竹里

寒に入りて筧の水の音冴ゆる　同

野も山も靜かに暮れて寒の入り　龍湖

空濠に焚火の見えて寒の入り　芭水

寒晴　寒日和

青空に鳶の輪をかく寒日和　龍湖

アドバルン斜に浮けり寒の晴れ　一如

寒旱

出がけ忙しくうがひしつ寒旱かな　一如

大寒

大寒の板間浸しぬ漬菜汁　芭水

大寒の行人稀に月明り　嘉兆

春隣

雪持ちし貨車來ずなりて春隣　艸丘

春隣背戸の紅梅綻びぬ　嘉兆

庭に山茶花あり

この花のちりつくす頃は春隣る　竹里

天文

時雨

峰に沿ふ松一列にしぐれけり　一如

時雨ふる夜の深みつゝ兒をみとる　同

大銀杏葉乏しらに時雨けり　同

鷗一つ飛んで釣舟しぐれけり　芭水

室出しゝ萬年青そのまゝしぐれけり　同

夕時雨厨に滿つる柚のかをり　百水

しぐるゝや軒の干菜の影消えて　同

山門を入れば時雨るゝ銀杏かな　竹里

篠植うる澪はしぐれて浪騒ぐ　艸丘
登りつきし四明ケ嶽や夕時雨　嘉兆
軒借れば懸菜にほへる時雨かな　歌子

冬の雨
寒の雨

麻雀の駒音高し冬の雨　芭水
軒燈の今宵ともらず寒の雨　一如

冬の月
寒月

遊び更けて繰る戸に寒の月きびし　歌子

草上書屋にて（經堂）

麥畑いつか暮れたり冬の月　一如

北風

北風の雲を拂ひて富士晴るゝ　芭水
街の灯のまばらとなりて北風募る　百水
畑中の火の見櫓や北の風　早苗
北風や山を屏風の大中寺　吳喬
換氣筒北風に鳴り風呂あつし　一如

霙

兄逝く

靈柩車かた〳〵と鳴り霙ふる　一如

雪

鷗飛ぶ海面暗し雪催ひ　一如

啜る茶に心落居ず大吹雪　同

炭竈に連なる峰の雪白き　龍湖

軒内にかけ干す足袋や雪あした　艸丘

冬日

尉の立つ焚火のあとや冬日和　龍湖

冬の日の照る間を蝶の舞戻る　竹里

水鳥のぽつかり浮ぶ冬日かな　嘉兆

深大寺吟行

蕪はぐ大根匂へり冬日向　芭水

同

てりかげる冬日のにぶし鵯の鳴く　一如

地理

冬の山

冬の山祠の近く見ゆるなり　芭水

稲塚の間に遠し冬の山　同

谿を縫ふ瀧かれ〴〵に冬の山　龍湖

炭燒の煙一すぢ冬の山　艸丘

冬山やすみわたりたる鵙の聲　吳喬

湯煙のほの〴〵として山眠る　一如

冬の海

菰着たる舟並ぶなり冬の海　芭水

崖崩す人影寒し冬の海　一如

焚火する人影小さし冬の海　歌子

冬田

遠山を股に冬田の慈姑堀り　龍湖

山の雲まばゆく冬田しぐれつゝ　歌子

枯野　朽野

御燈を消せば枯野の月がさす　吳喬

唄うたふ聲もからびて枯野原　同

朽野やいなゝき交はす放れ馬　同

底暗き沼の端行く枯野かな　龍湖

深大寺道

雲垂れて鳥も聲なき枯野かな　同

宮の杜徑明るう野は枯れぬ　芭水

イみて何を見とゝ枯野原　同

夕月に籾殻いぶり枯野道　一如

大富士のさやかに晴れて野は枯るゝ　同

征途送る手旗ひら〳〵枯野行く　艸丘

涯しなき枯野はるかに富士光る　百水

立ちつくす枯野の夕日大いなる　歌子

氷凍る

干し忘れし足袋に月影凍りけり　歌子

啄める實のまろびゆく氷かな　同

手水鉢はや氷りゐて星冴ゆる　同

鐵橋の影くろ〳〵と川氷る　一如

投げし麩に鯉も浮ばず薄氷　同

所々田面に光る氷かな　嘉兆

捨水の忽ち氷る寒さかな　同

打水も氷りて寒し出の衣裳　艸丘

絲つむぐ唄は氷の上ひゞく　竹里

霜

（冬）地理

つまづけば小笹すべりて霜華散る　艸丘
みそさゞいあさりくづしつ霜柱　同
霜晴のあした静けく海鳴れる　一如
霜の夜の藤豆破るゝ音すなり　同
殘る柿に日の暖かく霜とくる　歌子
霜解の地息やすらに籠張る　同
霜深し障子に動く糸車　龍湖
大霜や遊び忘れし獨樂一つ　芭水

人事

爐開　爐開くや濕りて固き殘り炭　芭水
自在鈎の煤を拂うて爐を開く　同
爐開や席ほのぐらく釜つるす　艸丘
客を待つ温泉宿の大爐開きけり　竹里
降るやうに星光りをり爐を開く　香雲

煖爐（ストーブ）　煖爐たく窓に青木の實の赤き　龍湖
朝刊をかざせば匂ふ煖爐かな　芭水

（冬）人事

ストーブに頬照らされつ熟柿喰ふ　百水

爐

征きて留守の爐火は静かに灰着たり　丁荳

懐爐

戰傷の繃帶白き懐爐かな　芭水

鳥屋かけて鴨待つひまの懐爐かな　百水

凍傷

凍傷の小手をかざせば灯のまぶし　一如

凍傷の手もてあやしつ子守行く　歌子

炭

灌ぐ水音立てゝ吸ふ炭俵　芭水

炭おこるしづけき中の讀書かな　竹里

炭を挽く音しづまりつ路次の奥　嘉兆

父戻るらし炭つぎつ耳すます　歌子

兄危篤

みとる夜を炭火とろ〳〵風つのる　一如

足袋

たそがれの足袋ほの白く妻歸る　一如

干足袋の軒につらなり海風げる　同

干足袋のくるり廻りて日ざし退く　芭水

白足袋の凍りてかゝる梅の杖　百水

寮の足袋日向に向けて干されけり　竹里

薪積みし裏庭に足袋干しにけり　早苗

掛大根　草上書屋

月照つて庭面あらはに掛大根　一如

年越　煌々と年越す宵の社殿かな　龍湖

節分　豆撒きやあの人聲は淺草寺　芭水

節分の豆の香籠る茶の間かな　艸丘

雪晴れて豆撒く聲のをちこちに　百水

やがて灯る軒のおぼろに豆を煎る　歌子

動物

水鳥　水鳥の波紋に雲のみだれけり　龍湖

浮寝鳥　亂杭の影澄む池や浮寝鳥　嘉兆

寒鴉　茅屋根のぐしの廣さや寒鴉　芭水

寒雀　寒雀日南に向いて吹かれけり　竹里

冬の蝶　石蕗の花黄に冬の蝶とべる　艸丘

山葵田に水ちろ〳〵と冬の蝶　同

掃き寄せし木の葉とまがふ冬の蝶　嘉兆

焚火して子らのかしまし冬の蝶　同

冬の蝶追へば入日に手のとゞく　丁苡

冬の蝶流れし芝の日の飛白　同

鐘楼のひゞきをよそに冬の蝶　竹里

庭石の温み慕へるか冬の蝶　百水

門前の日南しづかに冬の蝶　香雲

冬の蠅　蓑笠の戸口にさびぬ冬の蠅　芭水

凍蠅　硝子窓の夜冷えに蠅の凍てにけり　同

柿の皮干しゝ小縁や冬の蠅　同

縒車油さす手に冬の蠅　龍湖

凍蠅のひまもる風に翅動く　同

霧吹けば鉢木を落つる冬の蠅　百水

凍蠅や厨明るき人の聲　吳喬

冬の蠅匍ふ靜もりにひとり居る　一如

植物

歸り花　印を乞ふ寺しづかなり歸り花　芭水

冬椿（寒椿）　寒椿散るに委せて住ひけり　一如

細りゆく寛の水や冬椿　嘉兆

地息立つ雪解に散りつ寒椿　歌子

山茶花　山茶花に霜うつすらと朝日影　歌子

病む頰に似て山茶花の紅かなし　同

山茶花に圍まれし茶席や湯のたぎる　芭水

山茶花の花つゝましう庭の隅　百水

山茶花の散ってつくばひ濁しけり　艸丘

山茶花の茂みゆすぶる三十三才　吳喬

某友の一週忌に

白き赤き山茶花の束手向けり　竹里

茶の花

大根干す下に茶の木の花白き　龍湖

朝日洩る樹影に白しお茶の花　百水

茶の花に線香の煙流れけり　吳喬

殘菊

殘菊にまつはる蝶の影うすき　歌子

枯尾花

枯尾花乾きし音に戰ぎけり　芭水

枯蓮

蓮枯れて雨冷やかに鮒を釣る　艸丘

枯芝

さふらんの花紫に芝枯るゝ　一如

草枯

懸干葉の風にから〳〵草枯るゝ　龍湖

冬枯　冬枯や焚火にほてる渡舟守　龍湖

落葉　落葉たく白き煙に月懸る　百水

木の葉

落葉して手にとる如く富士見ゆる　同

谷水の渦にくるくる木の葉かな　龍湖

山荘の疊の上の落葉かな　艸丘

うら山の朝晴すがし總落葉　一如

新年

時候

今朝の春　はれ〳〵と御旗かゝげぬ今朝の春　一如

大旦　みたらしや青竹ひかる大旦　芭水

帚目に足ふみ入れぬ大旦　同

天文

初日　雲一つ波に浮べる初日かな　芭水

大欅寄り木にさす初日影　同

打寄する波靜かなり初日の出　百水

狛犬の雪しづれけり初日影　同

初日さす木立に白き幟見ゆ　龍湖

初日影富士の頂き紅さして　艸丘

わたつみも隈なく晴れて初日の出　嘉兆

人事

注連飾　裏山や注連新らしき道祖神　吳喬

萬歳　萬歳の袖長々と田圃道　芭水

掃きかけし門萬歳の噺しくる　同

梅固し萬歳通る杉田道　艸丘

萬歳に濱街道の暮かゝる　一如

萬歳の來る見えて梢日ざし初む　歌子

羽子　舞ふ羽子に輝ける兒のまなこかな　一如

松納　ちらばれる繩に雨來し松納　芭水

萬歳の舞はで過ぎけり松納　吳喬

來馴れたる萬歳は來で松納　竹里

仕事着の白さかひぐし松納　歌子

鳥總松　朝夕に向かはりけり鳥總松　嘉兆

會員小傳

堀越龍湖

字は滋、別に櫻石齊又紅葉山房と號す。明治四年十二月十八日栃木縣足利郡吾妻村に生る。幼より畫を好み、初め田崎草雲の門に入り南北合派の敎を受く。其後東京に出て菅原白龍に師事し、南畫を修業すること四年、師の歿後は專ら先哲の遺法に依り南宗派を研究し、別に一生面を開き、山水花卉を得意とす。性儒學を好み、同縣喜連川藩士高橋庸五郎氏に附きて漢學を學び、自から塾を開き名を璞玉舍といふ。畫の側ら諸生に敎授する事爾來十有五年に及びしが、中途眼病の爲閉舍し、專ら繪畫に從事す。諸種の展覽會に出品し賞牌を受くる事多々。又書道を好み專ら文徵明に私淑し餘暇あれば毫を揮ふ。嘗て縣人霜旦舍耕圃翁につき俳道を聞き、翁の歿後は伊東月草氏に師事す。

前橋芭水

本名喜重郎、明治九年四月二十九日栃木市薗部(現在の)に前橋喜内の二男、霜旦舍耕圃の弟として生る。郷里に於て義務教育を受けたる後、久松義典氏の塾に入り修學、後淺野總一郎氏の石油部に入り、仙臺、盛岡、小樽等に於いて出張所開設に當る。明治三十九年ライジングサン石油株式會社に轉じ、秋田、靜岡、名古屋、東京、各出張所主任として、勤續二十年、大正十二年辭任す。翌年小倉石油株式會社に入り下關に支店開設、九州、朝鮮、臺灣等の開發に當る。停年制により五十八歳依願退職す。

此頃より月草先生の知遇を受け、昭和十年光風會を設け、句作の指導を受けつゝ今日に至る。現在の趣味は實生流謠曲、曹洞宗菅原洞禪師に就きての寫經習畫、木彫等。

大林艸丘

本名勇太郎、明治十二年十月東京市京橋區八丁堀に生る。父業を繼ぎ、三男、三女あり。大正八年伯父の業を襲ひ、東京美術園畫博堂を京橋東仲通角に經營、新作畫の展觀をなし、大いに現代美術家の紹介に努む。大正十二年關東大震災に依り家屋を灰燼に歸し、同十五年遂に店を止めて、大井富士見ヶ丘に移住、現在に至る。

前橋吳喬

明治二十二年耕圃、芭水の弟として栃木市に生る。栃木中學を經て早稲田に學びしも半途退學す。大正元年近衞歩兵第三聯隊に入營し、同三年除隊す。大正四年より同八年迄東京府農工銀行に勤務す。大正九年より同十五年迄名古屋に於て實業に從事し、昭和二年上京して大森に住し、現在に至る。

小崎百水

名は恭人、蘿蔔邨莊主人と號す。明治二十四年の春新潟に生る。卯の一白水星なり、百水の號之に因る。

大正五年東大法科を出でて、今日迄腰辨生活正に二十有餘年、其間居を移すこと五度、東京——福岡——名古屋——下關——東京。漸く東京に落着けさうになり、先年練馬村に安住の地を得て居を定む。蘿蔔邨莊主人と號する所以茲に在り。

僕、由來文藝には先天的の低能兒、而も俳句、俳畫、淨瑠璃の如き日本固有の藝術を深く愛好し、出來得べくば自から手を染めんとする野望を懷くこと久し。昭和十一年夏、先達前橋芭水翁の手引に依り伊東月草、堀越龍湖兩先生の門下に連なり、臍の緒切つて四十六年、初めて俳句及繪畫の稽古をはじむ。

關口嘉兆

本名嘉重、壽脩庵、生祥舍の別號あり、明治二十四年十一月三日、栃木縣下都賀郡皆川村大字大皆川に生る。大正三年上海東亞同文書院商務科卒業、三菱合資會社に入社、後改組の爲め三菱商事株式會社に轉ず。爾來門司、漢口、北京、濟南、青島各支店出張所を經て、再び漢口支店に轉じ、後、本店雜貨部在勤中病氣の爲め大正十三年六月退社す。病氣恢復と共に昭和二年四月東京商業會議所(後東京商工會議所と改稱)に入所、南支、南洋各地を約六ケ月に亘り巡歷、貿易振興に努力せり。　現に參事、商工相談所長たり。

俳句は大正十三年病氣靜養中、栃木町霜旦舍耕園の門に入り、現在武藏野吟社並に光風會同人。

西田竹里

本名理吉、明治二十五年一月十二日、富山縣氷見郡藪田村藪田に生る。大正三年日本大學商科を卒業し、淺野同族株式會社に入社。昭和六年同社を辭し、株式會社吾妻商會に入り、目下日之出煉炭株式會社及び樫村炭鑛株式會社の重役を兼ぬ。

書道を好み東坡に私淑す。俳句は芭水翁の手引にて光風會々員の末席を汚す。

中尾一如

一、明治三十一年七月下野國栃木町薗部に生る。大正十五年三月東京帝國大學經濟學部を卒へ保險會社に入りしも數年にして退き現に銀行員たり。家族は妻と二女あり。鎌倉に小庵を結びて既に五年、環境靜閑にして心のどけく暇あれば海山に遊びて風光を賞し史蹟を探る。鎌倉は我が心のふるさととなれり。

二、父は霜旦舍耕圃と號し俳諧の行者たりしも余は資性遲鈍にして父の業を解せず、俳諧には無緣の衆生として空しく歳月を閲したり。然るに偶々光風會與り同人に加へられて研讃を積むに至り次第に枯淡なる俳句文學に魅了せられて、漸く其醍醐味を掬するに至る。たゞ非才にして進境の見るべきなく、乏しき詩囊を絞りつゝ貧しき收穫を喞つは是非なき次第なり。

三、余又圍碁と謠曲とを嗜む。

鈴木香雲

昭和十三年夏。中尾一如氏より「夏華」と月草先生の俳句作法を贈られ句作の機緣を得ました。同年九月初旬清瀨吟行により作句の興味を覺え月草先生及び光風會先輩の御指導を願つてをります。

生れたのは東京芝區愛宕下の仙臺屋敷。出生と同時に神田へ移り住みました。生來文事を好み一生をこれに捧げんとしたのですが一身上の都合で思ふに任せず。商業、經濟の學を修める事となりました。然し文藝の世界へはいつも憧れを持つてをりました。

學を卒るや母校の教職に推されましたが病を獲て辭し東海の邊に遊び讀書と飜譯の筆を執る。其後先輩の御勸めにより某大學の講師となり交通經濟學專攻の委囑を受けました。後突然の父の死に遇ひ家事を見る事となる。後竹工業會社の經營を致しましたが今はその任も他に讓りました。現在は自然の風物と學藝の道への思慕を深めてをります。

松本歌子

明治四十一年一月十三日栃木縣壬生町に生る。代々舊壬生藩里正たりし十二代の戸主松本庄兵衛の女。栃木高等女學校を經て、東京高等音樂學院に學び、卒業と同時に同學院講師となり、引續きショルツ教授に就きてピアノを專攻す。

曾祖父は甘曉と號し、東都閑月庵山曉門。祖父は白亥と號し同じく俳諧に親しみ、父また梅曉と號して花の本十一世不識庵聽秋に學ぶ。

光風會紀要

昭和十年九月創立　西大久保心月莊に於いて例會開催。

同人　堀越龍湖　前橋吳喬　西田竹里
　　中尾一如　關口嘉兆　前橋芭水

昭和十一年一月　同人參加　大林艸丘

昭和十一年二月　同人參加　松本歌子

昭和十一年四月十二日　鎌倉山吟行、一如庵にて句會。出席者、伊東月草　堀越龍湖　前橋耕圃　川島鳳子　中尾恒齋　山田早苗　大林艸丘　西田竹里　前橋吳喬　松本歌子　中尾一如　前橋芭水　以上十二名

昭和十一年八月

同人參加　小崎百水

昭和十一年十一月二十九日

經堂町月草庵にて臨時會開催。

伊東月草　堀越龍湖　西田竹里　大林艸丘　松本歌子　前橋吳喬　中尾一如　小崎百水　前橋芭水

外に　渡邊白蓉　長山　高橋　以上十二名

昭和十二年二月二十八日

堀越龍湖夫人逝去す。

昭和十二年五月九日

心月莊に於いて繪畫、彫刻、漆工を主とする會員餘技展開催。

出品　伊東月草六點　堀越龍湖三點　前橋耕圃六點　前橋芭水五十一點　前橋吳喬五十點　小崎百水三點　西田竹里三點　大林艸丘三點　松本歌子三點　中尾一如二點　外八點　合計百四十一點。

參觀者五十五名。席上山田靜子點茶饗應す。

昭和十二年七月二十日

贊助會員　前橋耕圃、栃木市自庵に於いて急逝す。

昭和十二年十月三日

野火止平林寺吟行。

伊東月草　堀越龍湖　西田竹里　前橋吳喬　小崎百水　中尾一如　大林艸丘　關口嘉兆　松本歌子

前橋芭水　以上十名

昭和十二年十二月五日

西郊深大寺吟行。

伊東月草　堀越龍湖　大林艸丘　小崎百水　西田竹里　前橋吳喬　中尾一如　松本歌子　前橋芭水

以上九名

昭和十三年二月

同人參加　山田早苗

昭和十三年四月

同人參加　臨田邦一

昭和十三年四月三日

練馬蘿蔔莊に於いて例會。開催千川堤吟行。

伊東月草　堀越龍湖　大林艸丘　西田竹里　中尾一如　小崎百水　糸川丁苡　松本歌子　前橋芭水
以上九名

昭和十三年五月
同人參加　糸川丁苡

昭和十三年五月八日
鎌倉朝比奈峠吟行。
伊東月草　堀越龍湖　小崎百水　大林艸丘　中尾一如　前橋吳喬　西田竹里　糸川丁苡　關口嘉兆
松本歌子　前橋芭水　以上十一名

昭和十三年七月六日より十一日に至る六日間
黒田呵雪　勝山秋人　山田如秋　志水清湖　大河原清一　其他の賛助を得、光風會同人中心となりて、草上文庫後援現代俳畫展を高島屋サロンに開催す。

昭和十三年九月
同人參加　鈴木香雲

昭和十三年九月十一日

柳瀬川吟行。
伊東月草　堀越龍湖　大林艸丘　小崎百水　松本歌子　鈴木香雲　中尾一如　以上七名

昭和十三年十月九日
大林組俳句會と聯合にて弘法の松吟行。
伊東月草　堀越龍湖　糸川丁苡　大林艸丘　中尾一如　鈴木香雲　西田竹里　小崎百水　關口嘉兆
松本歌子　前橋芭水　以上十一名

昭和十四年一月
同人參加　石川梅翁

索引

あ

秋近し 三八
秋隣 三八
秋澄む 六九
秋高し 六九
秋の聲 六九
秋暑し 七〇
秋の暮 七一
秋の夕 七一
秋寒 七三
秋冷 七三
秋風 七七
秋日和 七七
秋日 七七
秋晴 七八
秋の空 七九
秋の雲 七九
秋雨 八二
秋時雨 八二
秋の海 八四
秋の水 八六
秋の袷 八九
秋祭 八九
秋の蚊帳 九〇
秋の蝶 九四
秋の蚊 九八
秋櫻 一〇九
青 四〇
青簾 四八
青梅 六〇
青葉 六〇
青芒 六四
淺蜩 一二七
暑さ 一三七
明易し 一三五
雨蛙 一三四
紫陽花 六三
朝寒 七一
天の川 八一

い

凍る 一二七
凍蠅 一三六
蝗 九五

う

麗か 六
梅 二八
團扇 五〇
卯の花 六一
馬追 九六
末枯 一〇九
浮寢鳥 一三四

え

炎天 四三
衣紋竹 五〇
枝蛙 五四

お(を)

朧 一二
朧月 一三

扇 四九
扇置く 九〇
落し水 八五
落葉 一四〇
晩稻 一〇八
大旦 一四三

か

寒の入り 一一六
寒日和 一一七
寒早 一一七
寒晴 一一七
寒の雨 一二〇
寒月 一二〇
寒雀 一二四
寒鴉 一二四
寒椿 一二七
枯野 一二五
枯蓮 一三九
枯尾花 一二九
枯芝 一三九
蚊 五五
蚊遣 五一
蚊帳 五一
蚊帳名殘 九〇
風光る 一一
霞 一三
蛙 二六
蝙蝠 五三
蝸牛 五五
雁 九二
雁來紅 一〇七
柿 一〇一
懷爐 一三〇
掛大根 一三三
歸り花 一三七
かまつか 一〇七

き

ぎす 五四
きちきち 九八
如月 三
歸雁 二三
行々子 五三
金魚 五七
銀河 八一
桐一葉 九九
桔梗 一〇三
菊 一〇三
北風 一三一

く

草萠 三一
草雲雀 九八
草枯 一三九
暮遲し 七
暮早し 一二四
雲の峰 四一
山梔子 六三
朽野 一三五

け

今朝の秋 六九
今朝の春 一四三

紫雲英 三一
鶏頭 一〇六

こ

木の芽 二八
木の實 一〇七
木の葉 一四〇
更衣 四七
蟋蟀 九七
こすもす 一〇九
小春 一一三
氷 一二七

さ

殘暑 七〇
殘菊 一三九
轉り 二五
さるすべり 六二
寒さ 一二五
山茶花 一三七
下崩 三一
蜆 二七
菖蒲葺 四七
紙魚 五六
茂り 六〇
除夜 一二五
師走 一一六
時雨 一二九

す

注連 一四五
すいと 一七
ストーブ 一三九
涼し 三七
足袋 一三一
炭 三一
芒 五六
節分 一三三

せ

蕎麥の花 一〇八

そ

田打 二一
短日 一一四
大寒 一一七
煖爐 一三九
足袋 一三一

た

蝶 二六
ちゝろ 九七
茶の花 一三八

ち

月涼し 八〇

つ

露草 一〇六
摘草 二一
燕 二五
椿 二九
梅雨 三五
冷たし 一一五

と

鳥の巣 三三
鳥總松 一四六
蜻蛉 九三
年越 一三一

な

夏近し 九
夏めく 三七
夏の空 八六
夏の雲 一〇六
夏の川 二一
夏野 二五
夏山 二九
夏帽子 三五
夏柳 一一五
夏草 六五
榮の花 三三
苗代 一四六

の

野火 一三一
野分 七六
野菊 一〇六
長閑 七
幟 四三

は

淺し 四二
春寒 四五
春の朝 四五
春の晝 五〇
春の宵 六〇
春めく 六五
春晝し 三〇
春惜む 四六
春の月 九三
春日 一六
春の星 七六
春雨 一〇六
春の野 七
春の水 一八
春日傘 二一
春の蚊 二六
春隣 一一七
初嵐 七六
初汐 八五
初日 一四四
花菖蒲 六六
花火 九一
花はちす 一〇一
葉月汐 八五
葉鶏頭 一〇七
畑打 二一
蠅 五四
蓮 六六

萩 一〇五
羽子 一四六

ひ

日永 七
日盛 四四
日傘 四八
雲雀 二四
旱 四四
灯取虫 五七
百日紅 六二
壺菫 六三
冷やか 七二

ふ

冬隣り 七五
近し 七五

ほ

芙蓉 一〇五

ま

麻 五三
松落葉 五八
松納 一四六
松蟬 九三

む

無月 八一
麦刈 五三
麦秋 五三

め

目刺 二〇
名月 八一
木槿 一〇一

も

木瓜の花 二九
木犀 一〇一
冬の夜 一一五
冬の月 一四〇
冬の雨 一一〇
冬の海 一一四
冬の山 一一四
冬の田 一一五
冬の蝶 一一四
冬の蠅 一一五
冬の椿 一一七
冬の枯 一四〇
蕗の臺 一一一
冬の蝶 一一五
冬の月 一四〇
冬の雨 一一〇
冬の海 一一四
冬の山 一一四
冬の田 一一五
冬の蝶 一一四
冬の蠅 一一五
冬の椿 一一七
冬の枯 一四〇
蕗の臺 一一一
蛍 一一五
帶草 一四〇
蟬 九三
蟲 六五
三日月 八〇
水鳥 一三四
水温む 一九
木槿 一〇一
虫 九五
萬歳 一四五
納 一四六
落葉 五八
法師蟬 九三
南風 四〇
短夜 三五
實梅 六〇
實柘榴 一〇〇
夜寒 七一
夜 一六
野 一六
餘寒 四
柳散る 一〇〇
稍寒 七二
山吹 二九
焼野 一六

や

雷 四一
立春 三
立夏 三九
立冬 一一四
立秋 七二
行く年 一二六
雪解 一六
雪嵐 一三一
雪立 四二
夕 四二
蓑 四九
蓑切 五三
若楓 五八
若竹 六〇

ゆ

行く春 八
行く秋 七二
行く年 一二六

よ

雪嵐 一三一
雪解 一六
夕立 四二
蓑 四九
蓑切 五三

ら

雷 四一

り

立春 三
立夏 三九
立冬 一一四
立秋 七二

ろ

若竹 六〇
若楓 五八
開 一二九
塞 二〇
嵐 一三一
解 一六

昭和十四年六月二十日印刷
昭和十四年六月二十五日發行　【非賣品】

著者兼發行者　東京市淀橋區西大久保町二丁目二四六　光風會
代表　前橋喜重郎

印刷者　東京市小石川區表町五〇　岩崎松之助

發行所　東京市外保谷村　草上書屋
振替東京八〇三〇七番

390
255

終